

組織の横断的なつながりから生まれる、 みどりの地域協働プラットフォームの提案

一般財団法人世田谷トラストまちづくり
トラストみどり課 トランストみどり担当
菊地 直人

(地域協働 プラットフォーム 自然)

1. 背景

住み慣れた地域で人生の最後を自分らしく暮らすため、地域の包括的な支援やサービスの構築が求められている。誰もが安心して地域で暮らし続けるためのサービスは、公的なものと並行して、住民主体の活動との連携や協働によって生まれる新たなサービスやその基盤からも、創出される必要がある。

2. 事例

世田谷トラストまちづくりが管理・運営をしている、世田谷区立次大夫掘公園内里山農園は、地域住民や障害のある方など、様々な人が分け隔てなく、手作りでかつ楽しく農業に携わることができる、農福連携を目指している。この農園は、様々な主体と一緒に農業を楽しむための仕掛けを施し、異なる属性が横断的につながることによって新しい出会いの場となっている。このことから、みどりの空間を一緒につくりあげていく過程において、包括的に人々がつながっていけるプラットフォームを生み出せるのではないかと考えた。

3. 提案

住民やそこに関わるひとたちが持ち寄った植物からはじまる、みどりの場づくりを行うことによって、それぞれの属性・立場の人が関わりやすさを感じられる居場所を地域に創出することを提案したい。この場づくりに参加することによって、地域の未来をつくっている手ごたえを感じ、「自分ごと」として楽しいと思える活動になるのではないか。地域包括を考えるうえで、様々なステークホルダーを分断させず、むしろ組織が自らつながっていけるような仕組みづくりが、非常に重要である。そのためには、まず一つの組織にとって利益のあることだけでなく、関わっている組織全体で新しく価値を創造することも必要である。さらに、ある程度の公共性が担保され、場が開かれているということも、重要な要素の一つになる。そのことをふまえて、具体的な提案を考えたい。

4. ケーススタディ

提案内容を具体的に考えるために、一つフィールドを設定したい。住宅内で閉じてしまうのではなく、地域との交流機会から高齢者の社会参加を促す、高齢者住宅を対象とする。施設内の外空間に人々が植木鉢やプランターなどを持ち寄ることでできるみどりの空間の管理・運営を世田谷トラストまちづくりが主導して進めることを想定する。今回は、住宅側から直接、場づくりの委託を受けるという形にする。まず、巻き込みみたい周辺ステークホルダーの調査とその声掛けを行う。次に、関わる人たちとビジョンを共有する。それぞれの団体にとっての都合ではなく、枠組みを超えて新しい価値をみつけていくことを重要視していく。ワークショップは複数回を行い、次第に「自分たちの手でつくっている」という手ご

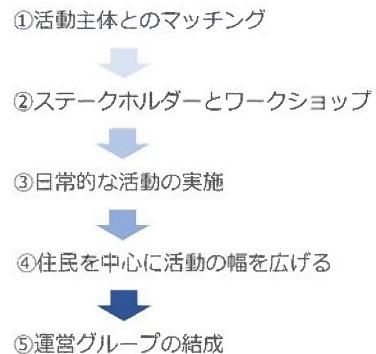
たえを感じられるように、ワークショップを構成していく。

次に、ワークショップで決めたことを踏まえて、実際に空間をつくっていく。つくっている途中の段階から外に対して積極的に場を開いていき、通りかかった人たちに关心をもってもらえるようにする。また、フリーペーパーなどで活動の内容を地域に発信する。このように、参加者が中心となって行うものを展開していく。日常的に場を開くことができたら、住民を中心となる活動の幅を広げる。新しいステークホルダーへの声掛けや、講師を呼び、とあるテーマを設定したイベントの実施、更には他の地域との交流プログラムなど、空間があることによって起きる事象の充実度を高めていく。

最後に、今後の場の管理・運営を住民グループに一任し、委託契約の終了とする。

この提案が実際に形になることによって、開かれた場づくりが周辺住民の意識変容につながることや、新しいステークホルダーの発掘、異なるセクターの横断的な関係性づくりにつながるのではないかと考える。

事業のフロー図



<助言者コメント> 杉原 たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

昨今よく「農福連携」という言葉を目します。農林水産省は「農福連携」について、「障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組です。農福連携に取り組むことで、障害者等の就労や生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業分野において、新たな働き手の確保につながる可能性もあります。」と説明しています（農林水産省 HP）。ここで大事なことは、単に担い手が不足している農業分野と障害者の働き先を探している福祉分野が連携して就労問題を解決するということだけでなく、これまでなかった連携が新たな価値を生み、それが社会的課題解決に繋がっていくということであると考えます。

本報告でも、ステークホルダーを分断しないためにも組織同士横断的な関係性を構築し、新たな価値を創出すること、そのためには「自分事」として地域と主体的にかかわることが強調されています。ケーススタディでは、高齢者住宅の外空間にみどりを持ち寄ることで地域協働のプラットフォームづくりがご提案されました。サービスの「受益者」としての高齢者が、みどりのプラットフォームづくりの過程で、いつしか子育て世代の母親の相談相手を担ったり、高齢者であるからこそ保有している収集を子どもたちに伝承したりといった「与益者」の役割をも高齢者自身が果たし、それを地域が新しい価値として地域で育っていくような光景を想像します。

2019（令和元）年に、次大夫堀公園を拡張し開設された「里山農園」。ご報告者の「一般財団法人世田谷トラストまちづくり」では、地域の方々と農園の畑の土づくりから始めていらっしゃるそうです。農業にとって要となる土づくりから地域の方と取り組まれる姿勢や、プロジェクト終了時までにその管理運営を地域に託す姿勢は、何かを育てるこにおいてとても大切なことだと思います。